



Title	懷徳堂物語（三）：幕末期の懷徳堂
Author(s)	山中，浩之
Citation	懷徳. 1984, 53, p. 5-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈連載〉

懷徳堂物語（三）

——幕末期の懷徳堂——

山中浩之

懷徳堂は享保九年（一七四四）大阪の町人有志によって設立された学校です。同十一年（一七三六）、幕府から土地を与えられるとともに諸税免除の扱いをうけ、半官半民の形をとって、明治二年（一八六九）まで百四十六年間存続しました。ひと口に百四十六年間といいますが、これだけの長期にわたって存続した学校は、明治以後の近代学校制度の中になくことはもちろんですし、江戸時代においても、ごくわずかの藩学をのぞけば見る事ができません。林家の聖堂といえども一時つぶされそうになったのを、幕府直営の昌平校となることで存続しえたのです。

まして懷徳堂は民間有志の経営によって存続したものです。そこには運営者たちのはかり知れない苦心と受業生たちの熱意が注ぎこまれたといわなければなりません。その懷徳堂も明治二年、ついに閉鎖のやむなきに立ち

至ります。実は、この連載の第一回目、加地先生は廃校の原因を探ることからおはじめになりました。今回はそれをうけて、従来あまり知られていない幕末期懷徳堂の問題点についてふれながら、廃校の経緯と理由について考えてみたいと思います。

（一）

さきに先生は、廃校の原因を（一）洋学流行によって漢学塾が打撃をうけ、生徒が減少したためというのは当然なこと、（二）多くの寺子屋・私塾が廃滅するのは明治五年の学制によってであるが、懷徳堂の閉鎖は明治二年であり、それとは無関係であることなどをのべられました。

私もその通りだろうと思います。幕末の大阪に限っても、篠崎小竹の梅花社、藤沢東咳の泊園書院、広瀬旭莊

の九桂草堂など多くの門弟を擁し、活発な活動をつづけていた漢学塾がありましたし、またそれらの塾は必ずしも洋学塾と対立するものでなく、緒方洪庵の適塾などとは盛んに門弟の交流を行なっていました。漢学塾はこの当時、洋学の盛行とそれほど対立するものでなく、むしろ相補う関係にあったといえます。したがって懷徳堂も漢学中心の学校だからといって衰える理由は少しもなかったわけです。

ただそうはいっても、さきの梅花社、泊園、旭莊塾などにくらべると、幕末期における懷徳堂は、ややそれらの影に隠れて、その活動が表面に見えにくいのも確かです。当時の諸家の文章や記録に、それ以前とくらべると、懷徳堂のことがあまり出てこないのです。それはなぜでしょうか。懷徳堂が衰退したからでしょうか。

竹山・履軒時代の懷徳堂は、他の多くの学者たちとの交流研鑽を通して、自分たちの学問思想の展開を行ない、それがまた教育活動を導いていたと思われる。その後をうけて懷徳堂になったのは中井碩果（七郎）でした。碩果は自分が懷徳堂になうことになるとは思っていないにちがいません。というのも彼には蕉園という非常な才能ある兄がいたからです。その蕉園は

しかし享和三年（一八一三）、三十六歳でなくなりました。父竹山もその翌年になくなります。七郎にとって、この二人の相つぐ死は思いがけないものだったでしょう。七郎は文化元年（一八〇四）から、天保十一年（一八四〇）歿するまで、四十年近くにわたって懷徳堂を預かることになったのです。ところが、この長い期間について、その活動をうかがう資料がほとんどありません。懷徳堂の歴史の中で、一つの空白状態ともいえる様相を呈しています。それはどうしてでしょうか。

竹山歿後、尾藤二洲が頼家にあてた書簡の中で「七郎大舞台、嘸コマリ申すべく候。此方へハ絶テ便モこれなく候」といい、頼春水も七郎に対し「足下御文通御好み成されず候」と、やや気がかりな様子でのべています。実際、碩果には他の学者との交流を避けるかのような消極的な姿勢がみられます。したがって学芸界の中に彼の名をみることもまれです。

ただ七郎の妻おていは、頼山陽の母梅隠と従妹であり、頼家とは親縁関係にありました。しかし、七郎と山陽との間には交友関係がほとんどありません。文化八年、頼山陽は備後神辺の菅茶山の塾を出奔して、大阪へやってきますが、そこで頼ったのは篠崎小竹でした。そ

のときは中井履軒がまだ健在で、山陽の行跡について厳しく叱責していたので、懷徳堂を敬遠していたのかもしれません。しかしその後、山陽が京に住むようになってからも、懷徳堂と山陽との交渉は、文政七年（一八二四）九月、母梅颯に同行して懷徳堂に来、「竹山先生遺稿」をみた、「梅颯日記」に記す以外、ほとんど知ることができません。

最も親しいとみられる頼家との関係においてもこのようなです。碩果時代に顕著なのは、交友の狭少化ということだといえます。これによって懷徳堂の学芸界における表面的な活動は少なくなったようです。しかしそのことは必ずしも懷徳堂の衰退ということではありません。

実は碩果の時代において、最も経済的には豊かであったといわれているのです（『懷徳堂考』その他）。それはどうしてでしょうか。学芸界ではなほしく活躍する学者たろうとしなかったにもかかわらずです。

私は、おそらく、そのことがかえって安定した経営を成立たせたのではないかと思っています。つまり碩果がひきついだ懷徳堂には、竹山、履軒のこした遺産、――懷徳堂という学校の著名度と多くの門人――がありまして、碩果はそれをそのままひきつぐことができたので

す。そうしてその門人をことさらに拡大するような活動はせず、それら門人と懷徳堂との関係をできるだけ親密にし、かれらとのつながりを強くすることによって、懷徳堂の安定維持を図ったように思われます。つまり外への広がりをおさえて、懷徳堂内部のつながりを強めることが、碩果の経営方針であったように思われるのです。それはたしかに一面では消極的、閉鎖的な形でありましたが、また経営安定のための一つの選択でもありました。

ただそのようなあり方は、内での親密さを増しはしましたが、反面、教育面での厳しさを薄めることにもなつたようです。『懷徳堂夜話』という碩果の授業を受けた人の筆記がのこっていますが、それをみますと夜講のあと、たいいてい雑談がなされています。雑談がいけないというのではなく、師の方も学生の方も、むしろ雑談が主になっているような印象をうけるのです。そして、書生たちの生活態度の悪さが目立ちます。書生たちが、煙草盆や行灯をひっくりかえしても、師の碩果が叱りもせず、書生たちがそのまま放っておくのを見過ごしているような様子で、師の放任と書生の乱れに、この筆者自身でさえ腹を立てているほどです。

内部的な親密さを強めて、外からの刺激を薄めてしま

った碩果時代の懷徳堂では、このような生活態度の放任と授業のマンネリズムを結果してしまったのではないでしようか。保守化することで安定経営をめざそうとしながら、内での緊密度を弛緩させてしまったのです。私は碩果時代における懷徳堂の変質をこのように考えています。

(二)

碩果は天保十一年(一八四〇)三月二十四日病歿しましたが、碩果には男子がありませんでした。その後をうけて教授となったのは並河寒泉でした。寒泉四十四歳のときです。寒泉は森小路に塾を開いた天保三年から明治十二年歿するまで、四十七年間にわたる膨大な日記を書きのこしています。それは『居諸録』と題されて一部欠落があるものの、五十七冊が現在、天理図書館に貴重書として保存されています。それはいろいろな反古紙や祝儀の包み紙などをも利用し、大きさも不揃いの紙を用いて綴り合わされたもので、質素で几帳面な寒泉の人柄をそのままみえるような日記といえます。その膨大な日記の一部しか見るに至っていませんが、これによって少し寒泉時代の懷徳堂についてのべ、その廃校の理由に説き及びた

いと思います。

寒泉は碩果死後、一時途絶えた日記を、その翌天保十二年六月からあらためて書き出しています。そこでまず注目されるのは、非常に規則正しい講業の営みです。一日の「升堂教授」二の日「升堂教授・夜講近思録」三の日「升堂教授、夕五代史会説」四の日「升堂教授・夕講易」五の日「休日、午後記事会」六の日「升堂教授」七の日「升堂教授、夕講近思録」八の日「升堂教授、夕五代史会説」九の日「升堂教授、夜講易」十の日「休日、午後文会または詩会」

二・七・四・九の夜講は、懷徳堂設立以来の伝統となっている公開講義ですが、それが規則正しく寒泉によって行われております。この夜講は玄関から講堂まで襖をはずして三室ぶつとおしにし、講堂には燭台がめぐらされ、そのあかりの中で多勢が聴講するさまは、一種壯觀を呈したといえます。この夜講を基本に、午前中は「升堂教授」すなわち講堂で素読を中心とした年少子弟への教授が毎日行われています。そうして三の日と八の日の夕は会読を行なっていますが、これはおそらく学問専攻の寄宿生と通学書生とを対象に行われたものだと思われます。五と十の日は休日ですが、その午後に行われた記

事会・文会・詩会もその人々のために行われた詩文練習の会であったことがわかります。

このように寒泉は教授となつてから、まず講習の立直しにつとめたのでした。この講習は連日たゆみなく行われ、廃校に至るまで厳格に変わることなく持続されています。世情多難の幕末にあつて、たとえ世間に何があろうと、この講習日だけは動かされまいという意地にも似た堅固さで、孜孜とした営みがつづけられているのです。その頑固さはかえつて人の心をうつものがあります。そのたゆみのない講業によつてこそ、懷徳堂が支えられつづけたのだということが感じられるものです。

(三)

寒泉が懷徳堂の基盤再確立のために行なつたことの一つは、このような講業の充実ということでしたが、彼がもう一つ積極的に行なつたものに出講がありました。すなわち人の依頼をうけて、懷徳堂から出張して行なう講義です。その出講先で当初から最も恒常的で重要な位置を占めるのは、平瀬家です。平瀬家とは梶木町で兩替商を営む千草屋のことで、当時の長者番付の上位に名を列ねるほどの富商でした。この千草屋こそ、幕末期におい

て最も懷徳堂を経済的に支えた商家であつたのです。明治期において大阪財界の文人として著名であつた平瀬露香翁は、もと亀之輔といい、当時の懷徳堂の門下生でした。

商家への出講はこの平瀬家に限られたようですが、他の主な出講先はどこだつたでしょうか。それは町奉行や蔵屋敷関係などの武士役人層です。たとえば大阪東町奉行役人、朝岡氏・田中氏や、柳川藩邸が早くからみられ、その後、代官竹垣三右衛門、京橋口定番米倉丹後守、高崎藩留守居新家氏、代官設楽八三郎、玉造口定番酒井右京亮、東町奉行佐々木駿河守等々が、みられます。そういう中でとくに注目される一人は、天保十二年(一八四一)八月八日に寒泉に講業を依頼した内山彦次郎でしょう。内山彦次郎は西町奉行配下の与力で、天保八年の大塩の乱のさい、一たん隠れた大塩を探知して捕縛に向い、自滅に追いこんだという事績をもつ人として知られています。しかし、それよりも諸物価引下げのすぐれた経済政策を立案し、幕府の天保改革にも影響を与えたほどの有能な実務家とみられるべきでしょう。西町奉行は何度も交代しましたが、つねにその下において実務を取りしきつたのはこの人であり、内山あつての西町奉行と

いってもよいほどの實力をもっていたといえます。この人が、天保十二年八月八日、寒泉に孟子の出張講義を頼んだのです。その後、阿部遠江守や永井能登守、久須美佐渡守などの代々の西町奉行就任者たちが懷徳堂へつぎつぎと出講を依頼してくるのもこの内山の周旋によつたとみることができます。安政三年の久須美氏の懷徳堂来駕もこの内山彦次郎の周旋によるものでした。内山自身もずっと寒泉の出講を迎えつづけています。

この内山と並んでもう一人、注意すべき人物が懷徳堂と関わりをもっていました。その人とは、坂本鉉之助です。この人も内山と同じく大塩の乱において名をあげた人で、大塩側の大砲方梅田源左衛門を狙撃し、乱勢を壊滅させた人として知られています。彼はその功によって玉造口定番与力として桃谷に邸を与えられ、砲術を教授しました。彼はもともと荻野流砲術の大家、坂本天山の子で、与力として大塩とは旧知の間柄であり、その人柄をよく知っていました。彼の書きのこした大塩の乱の記録『咬葉秘記』は、乱の実況を最も正確に伝えるものとして高く評価されています。ちなみに吉田松陰が嘉永六年、大阪へきたとき、最初に訪ねて、歓談したのもこの鉉之助でした。

この坂本鉉之助とは、碩果が大塩の乱のさいの功績を讃えて詩を贈ったこともあり、以前から交際があったようですが、天保十三年正月、この鉉之助が関東から大坂の警備にきた武士たち九人を懷徳堂に入門させ、竹山の『逸史』の出講を依頼しています。鉉之助自身は関東の士たちが帰ってから、懷徳堂にはしばしば来ており、とくに履軒の『弊掃』を読んでいる記事が散見します。元治元年、彼が歿したとき、その墓碑は寒泉が撰書しています。すなわちそれほど交友関係があったのです。

この二人はともに大塩の乱鎮圧に功を立てた人で、判官最賈の強い人々の間では悪役扱いされがちですが、善者悪者の人間観では歴史は貧困になってしまします。かれらはたとえ、幕府の開明派官僚川路聖謨に類した実務家だったといえるのではないでしょうか。こういう当時、著名な、しかも武士層に影響力ある二人と関係をもったことは、懷徳堂にとって大きな強みとなったと考えられます。

寒泉時代の懷徳堂は、このような町奉行役人層や定番勤務の武士たちを門下知友の大きな支えとしていたのです。碩果時代の内部的つながりに頼る門人層の維持では先細り弱体化は目にみえていたことでしょう。門人層

の基盤を新たに確立しなおすことは寒泉にとつての課題でもありました。それをこのような武士層との交流確保へと方向づけたのは寒泉における一つの選択であつたのです。それが当時において最も現実的で安定した方向と考えられたからです。幕府の力を背景にもつことは、幕末といえども、まだやはり最も現実的な強みであつたにちがひありません。

寒泉は道徳家・教育家であり、文人との交わりを嫌つたため、当時の学芸界での活躍は目立ちませんが、懷徳堂の教育活動は相当充実したものであつたことがうかがわれます。文久元年（一八六二）、仙台藩の岡鹿門（松本奎堂らと雙松岡という塾を作り、大阪で尊攘運動を画策した人）が懷徳堂を訪れたときの記事に「学舎、生徒充溢、日夕咄晤、竹山・履軒の盛時を想見す」（『在廳話記』第三集巻五）と記しております。慶応二年は最も激動の年でしたが、その年でさえ十七人の入門者を数え、その内十人以上は武士で、またその内少くとも五人は各藩の蔵屋敷役人であるという形をとっています。町人とみられるのは四人です。さきほどのべましたように、武士を主力とした門人構成をここにもみることができ、全体をみた上でなければ、はつきりいうことはでき

ませんが、たとえ町人が入門者として多数を占めていたとしても、武士の門弟が主軸であつたという性格は変らないのではないかと思います。つまり奉行役人や蔵屋敷役人らが多く入門しているということが、一般の人々にとつても現実的で安定した印象をもたせたにちがひありません。また武士役人層たちと一定のつながりをもちうる機会ともなりえたわけで、その意味で武士層が主軸であつたとみられるのです。

またその過程で、周辺農村にも門人を獲得していったことをみることができます。河内久宝寺の稲垣菊堂や、菱江村の藤戸寛斎などはその代表でしょう。また河内国分村では柘植中務や東野哲二郎という人々が門下にみえますが、実はかれらはその地域に郷学立教館をつくった中心の人々で、地域住民の生活と一体化した教育施設を営んでいたのです。そこには懷徳堂の影響をうかがうことができます。またその立教館の運営に援助を行つたのが、やはり寒泉の出講をうけた代官設楽八三郎であつたことも、懷徳堂との深いつながりを示しています。

(四)

それでは寒泉を中心としたこの運営によって懷徳堂は

安定した経営を保ちえたでしょうか。それは否です。安定化したようにみられますが、堂の経済状態は決して十分ではありませんでした。入門料や授業料は、寒泉に学ぶ者は寒泉に、桐園に学ぶ者は桐園に納め、学校預り人である桐園が堂運営費と二家の生活費を負担したといわれております（「安政以後の大阪学校」懷徳九号）。おそらくこれではつねに窮迫状態を強いられたのではないのでしょうか。授業料の額は伝統的に自由なものでしたが、大体金二朱（一兩の八分の一）とか、金百疋（一疋は錢十文）まれに二百疋というのが普通であったようです。

それが年に新年と中元、および三五月の節句に納められたといえます。ただし寒泉の日記では、入門時以外は、饅頭とか餅とか半紙とかの物品による謝礼が多くみられます。かりに一人の生徒がお金で一年間納めたとして、せいぜい一兩弱、多い者でも一兩半程度だったでしょう（安政年間の大阪貨幣相場で錢一貫文〓約銀一〇匁、金一兩〓約銀六〇匁）。また仮りに生徒総數百人とするなら（明治二年七月十五日の日記に百二生徒とみえる）、総額でも百兩程度だったのではないのでしょうか。

篠崎小竹の梅花社では、毎年約四十～五十人の入門者を数え、また小竹自身が潤筆料を稼ぐなどして嘉永頃

で年五百兩ほどの収入があったといわれます（木崎好尚『篠崎小竹』）。それにくらべて懷徳堂の収入ははるかにすくないことは確かです。そして公開講義の夜講が無料に近かったであろうことを考えると、負担はより一層大きかったといえます。また幕末期の諸物価騰貴がさらに追い打ちをかけていました。

もちろん懷徳堂には、このほかに経営を助成し参画する人として同志が存在していました。この幕末においても原則として毎月二十五日に同志会が開かれており、大體十數名の出席がみられ、『逸史』などを講読しあったのち、小宴を開いている様をみることができます。しかしそれには重代の懷徳堂門下である学者たちが約半数を占め、ほかには平瀬氏、山片氏などをのぞいてあまり富裕な商家はみられないようです。つまり一定の助成はなされたとしても、それは経営を十分なものとするには程遠いものだったと思われます。几帳面な寒泉の日記に、その種の記載がみられないのも氣になります。これらのことは預り人の桐園に任せて、自身関知しなかったとも考えられますが、まったく記載されないのは不審です。あるいは記すほどの助成がなかったのかもしれない。

天保三年（一八四二）碩果時代に六十九名からなる大規模

な助成義金が募られて以後、寒泉、桐園時代になって確認できる助成は、安政六年（一八五五）の白山彦五郎と平瀬宗十郎とからの義金貸付です。これはそれぞれ白山家銀二〇貫目、平瀬家銀四五貫目を借りうけ、それをまた両家に貸付けて、その利息を受け取るという形のもので、一定の補助にはなりえても、これで急に経営が好転するという性格のものではありません。これは年限五年の契約でしたが、五年後の文久三年になって、今度は平瀬家に対してのみ、さらにもう五年の期限延長を願い出て承諾をうけています。

幕府からは何の手当もありません。授業料に依存して運営していくことは、懷徳堂設立以来の主旨ではありませんでした。値上げなどはいちもよらないことです。貧書生でも学べるような配慮と施設を維持しつつけるには、同志の義金に俟つはかなかったです。富裕な同志が減少するとともに、先行きのみえない世情の中で義金は減少せざるをえなかったと考えられます。つまり、懷徳堂は、多くの門人をもちえても、それが経営の安定と必しも直接結びつかないという性格を当初以来もっていたともいえるのです。そこに懷徳堂経営の大きな問題点がありました。それが、この時点でとくにあらわにな

ってきたといえます。

(四)

慶応二年（一八六六）正月十七日、寒泉の古希の宴が懷徳堂で催されました。この四日後、二十一日は薩長同盟が成立したときで、幕府倒壊が目前に迫りつつあるときでした。選ばれた新旧の懷徳堂関係者合わせて四十八名の出席を得、竹山・履軒等の書画をかけ並べ、盛んな宴がはられて、深夜まで興をつくすということがありました。しかしこれは懷徳堂にとって最後の感興の集いであつたのです。

この後、懷徳堂ではもはや同志の助成金に頼ることもできませんでした。懷徳堂では、この激動の時期において、なんとか永続の方策を見出そうとしました。慶応二年（一八六六）十二月、かつての寒泉の門弟で、当時、京都守護職の会津藩主松平容保（中川宮）に従ってきいていた医師高橋順甫という人から、朝彦親王が懷徳堂を再興したい思召をもたれ、会津藩に内命がなされたとの知らせを、寒泉・桐園に伝えました。寒泉はそれに接して「是れ吾庠斯文興起の秋至るなり、勉めざるべからず」と日記に記しています。寒泉はすぐさま上京して協議しましたが、この

とき思いがけなく孝明天皇の崩御という事態に當つてしまったのでした。これがどれほど可能性があつたものかわかりませんが、この企図もそのため立消えになつてしまいました。

慶応三年正月、今度は、直接、大坂町奉行所に、貧書生の勉強をなんとか持続させるための援助を願ひ出しました。しかしこのような時期にそれが聞き入れられる筈はなかつたのです。取りつくしまもなく一蹴されて、桐園は「慚然として退く」より外なかつたのです。

時ここに至つて、なお幕府に願ひ出ざるをえなかつたところに、懷徳堂の存在そのものが抱えこんでしまつていた矛盾悲劇がありました。懷徳堂は、諸役免許といふだけで、当時なんの援助もうけていなかったのですが、そのこと自体が懷徳堂の存在を位置づけていた以上、幕府倒壊を目前にしながらも幕府との關係を断ち切るところは幕府しかなかつたのでした。これは懷徳堂が官許となつたとき以来、ひそかに抱えこんでいた最大のディレンマであつたのです。幕末期に關係を深めることによつて、そのディレンマはより深くなつていたといえます。このときそれがはじめて鋭く意識されたでしょう。しかしそれ

はあまりにも遅すぎました。

幕府倒壊を経て、新政府となつた慶応四年三月、大阪の管轄局であつた大阪裁判所より寒泉・桐園宛に出頭の命がありました。不安な気持ちであつたにちがひありませんが、そこで言い渡されたことは意外にも学校のことは「まさに旧典に従うべし」ということであつたのです。廃校を言い渡されるのではないかという危惧は当然あつたにちがひありません。寒泉たちは、存続の望みがありうることを喜んだのでした。しかしそれは束の間の望みにすぎませんでした。新政府の方針がまだそのときは未決定であつたからにすぎなかつたのです。

しかし翌明治二年一月に至り、次のような新政府の布令が出されました。「旧幕府ヨリ苗苅帶刀差免シ、或者扶持遣シ、諸役免除等申附候儀、一切廃止被仰出候事」(傍点筆者、『大阪府令集』一)。そして同年九月五日、再び裁判所から懷徳堂へ召喚状がきました。桐園が出頭しましたが、そこで言い渡されたことは、「書堂、除税を以て年を経、以て今に至る。自今まさに出税すべし」ということでした。すなわち旧幕府が許した除地諸役免許という特権を取り上げるということだったのでした。それは直接に廃校を意味しませんが、懷徳堂の経営状態に

とってそれは廃校の申し渡しと同じ意味をもちました。

税を負担しようとすれば、堂を売却するしかないことを意味したからです。寒泉はこの報に接して「翁これを聞き、覺えず涙下る、須臾、言を出だすこと能はず」と記しています。

すなわち懷徳堂は、門人がいなくなったからでもなく、また旧制度の教育機関であったからでもなく、まさに旧幕府から特権を与えられていた一施設であったというところのために、その特権を剝奪されるという形において廃絶に立ち至ったのです。懷徳堂にもこれが適用されたのには、幕末期における武士層との接近関係が一定の影を落としていたことでしょう。

寒泉による武士役人層を中心とした門人層再確立は、皮肉にも、かえって明治新政下における廃校を速かならしめたといえます。

九月二十日、裁判所からもう一度よび出しがありました。そこで氏を廃し、屋号を名のるようになっています。この屈辱的な命令もやむをえずのまなければなりません。懷徳堂のある尼ヶ崎町壱丁目水帳には貼紙がさがれてつぎのように記されています。

「学文所御廃止自今如此ニ成

中井屋

修二[㊦]

明治二巳年九月廿八日 「

すなわち明治二年九月二十八日、懷徳堂は学問所としては閉鎖されたのでした。十月には本荘村に新たな舎屋を買い、懷徳堂は油掛町に住む天満屋（安田）広介なる人に売却されました。寒泉たちが堂舎を去ったのは冬も十二月、「百余り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりて出づ」の歌を門に貼りつけて立去ったのでした。

しかし懷徳堂は、明治の末に再び興り、そして今また三たび興ろうとしています。そこでは、必ずこの廃校の事情を一つの教訓として、大阪に生活する人々とともに歩む新たな道を開きつつあると確信します。

（付記、本稿は昭和五十九年三月二十五日、誓願寺における第一回懷徳忌においてお話したことをもとに成稿したものです）

（大谷女子大学講師）